あの神様のお望みのまま

†アラクネ†

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの神様のお望みのまま

【Ｎコード】
Ｎ６２２８Ｂ

【作者名】
†アラクネ†

【あらすじ】
理由も理屈も関係無く、あたしはこの現世から離れ、【死の世界】に帰りたくてしかたない。死の世界に戻る為に自殺を試みるも、あの女が必ず邪魔をしにやって来る。

（前書き）

多少、猟奇的な表現を含みます。

あたしはこの世に生まれ落ちたその瞬間から、常に死の世界に舞い戻ることを切望していた。

赤ん坊の頃は理由も無く授乳を拒み。
歩行が出来るようになれば、危険な場所にばかり進みたがり。
年齢が二桁になった頃には、自ら理解した上で死に繋がるような行為を行うようになった。
『全く、困ったものねえ』
いつも面倒臭そうに溜め息をついていた母親は、二年前に男と消えた。
事実上、唯一の肉親であった母がいなくなったおかげで、あたしは晴れて天涯孤独の身だ。
死の国への回帰願望は、日増しに募るばかり。

その日、あたしはバイト先のキャバクラには顔を出さず、適当に選んだ証券ビルの屋上で風を受けていた。
時刻は深夜。高い手摺りをよじ登って下を覗くが、街の細かい明かり以外は何も見えない。
「う～ん……」
あたしは顔を上げ、用心深く周囲を見渡す。
とりあえず、辺りには何の気配も無い。薄暗い屋上はしんと静まり返っている。
アイツは、いない。
あたしはそれだけ確認すると、何の躊躇いも無く、手摺りを蹴って地上十五階の大気に身を踊らせた。
ヒュ、と風の音。

次いで、凄まじい落下の感覚。
思わず悲鳴を上げそうになるが、声を発する前に迫る、コンクリートの地面。
――――グシャリ！
全身に凄まじい衝撃が走り、折れた骨が腹と胸を突き破る嫌な音が、体の内側から聞こえた。
普段の生活では、想像も出来ないような、激痛。
ピクリとも動けないあたしの周囲に広がる、生暖かい血溜まりの量は半端ではなく。
（ああ、……上手く、いった……？）
意識が急速に遠退くのを感じて、あたしは満足しかけた。
しかし、やはり今回も、あの邪魔者の靴音が、あたしの安堵をぶち壊す。
カツカツカツカツカツ。
あたしは動けないまま、甲高いその音に、心の底から絶望する。
「ああ良かった、間に合った。駄目ですよぅ。Ｂ-１２０４７７」
そいつは真っ赤なミニ丈のスカートスーツを着て、同じく真っ赤なハイヒールを履いている。
人のことを番号で呼ぶな。そう吐き捨てたいのに、声帯が潰れていて声を出せない。
「あーあ、ぐっちゃぐちゃ。ヤバかったなあ。間に合って良かったあ」
言いながら、そいつはあたしの頭をぐいと掴み、湿った音を立ててアスファルトから引き剥がした。
「ええと、Ｂ-１２０４７７、破損レベルＤ＋。治癒開始します」
報告の言葉を口にすると、そいつはあたしの首に細い指を当てた。
うぐっ、と、あたしは呻く。
まるでビデオを巻き戻すかのように、溢れ出た血液が体の中に戻っていく。砕けた骨も寄り集まって元の形を復元し、ボロボロに破けた皮膚が合わさり、何事も無かったかのように修復されていく。

丁寧なことに、その時の激痛をも再現しながら。
「痛い？痛いでしょお～？だったらもう止めましょうよお」
瞬く間に再生されていくあたしの顔に、女はタバコの煙を吹き掛けた。

いつも、こうだ。
決心して、覚悟を決めて、痛みを耐え忍んで行う行為を、いつもこの女が無駄にする。
「……っ、の、クソ、女」　声帯が復活したと同時に、右手の中指を立ててそう罵ってやる。
「んふ、元気になったようで何より」
女が黒いマニキュアを塗った爪で軽く弾くと、あたしの中指はパキンと砕けた。激痛から開放された直後のこれは、かなりキツい。
「その指は治してやんない。ま、少し反省しなさいなあ」
道路にうずくまって悶えるあたしに、女は満足そうに微笑んで踵を返した。
カツカツ、と、軽快な足音が遠退いていく。
（は、いい気になりやがって）
心臓にまで響く中指の痛みに耐えて。あたしは女の気配が闇に消えたのを確認してから、よろよろと立ち上がった。
（今日は、これで終わりじゃねーんだよ、馬鹿女）
あたしは深く息を吸い込み、深夜の街を走り出す。

女が初めて現れたのは、あたしが十一才の時。盗み出した農薬を飲み、初めて自殺らしい自殺を試みた夜のことだった。
断末魔の苦しみにのたうちながらも、あと少しで死ねると確信した、その瞬間にあいつはやって来た。
「初めまして、Ｂ－１２０４７７」
鍵がかかっていたはずのドアから唐突に現れた女は、やはり真っ赤なスカートスーツに赤いハイヒールという姿で。

「あなたには、生存の放棄は認められておりません」
と、笑顔で言うなり、いきなりあたしの口にその白い腕を突っ込み、内臓を掴み上げた。
「特別処置しますんで、死ねない…いえ、死なないから安心して下さい。きちんと丁寧〜に洗ってさしあげますからねえ」
軽い口調とふざけたウインクを合図に、女の素手による“処置”が始まった。
その苦悶と比べたら、先程までの農薬による苦しみなど、蜂に刺された程度のものでしかなかっただろう。
あたしは口から引きずり出された胃や腸を爪の先で切り開かれ、あまりの痛みにくぐもった絶叫を上げた。
悲鳴が途切れないうちに、開いた内臓の内側に何かの液体を注がれ、乱暴に洗われる。
あまりの苦しみに失神することも出来ず、泣きながら止めてくれと哀願しても無視される。
その想像を絶する苦痛、悪夢のような信じがたい光景は、一時間近くも続いただろうか。

地獄のような処置が終わり、痛みのショックで動けないあたしに、女はにこやかに語りかけた。
「紹介が遅れましたねえ。私はあなたのような《死にたがりの魂》の自殺を阻止し、正しい方向に導く役目を与えられた神の使いです」
派遣ですけどねぇ、と女は小さく付け加えた。
「まあ、今回ので分かったでしょうけどお。自殺なんか絶対成功させないし、やったらまた痛い目に合わせますから。ま、生きて下さいな、頑張って」
あの時見た残酷な笑顔と靴音は、今でもあたしのトラウマとなっている。

それからというもの、女はあたしが命を絶とうとする度に、どこ

からともなく現れるようになった。
今日のように、胸の悪くなるような【お仕置き】を土産に持って。
（そんなのを、もうどれだけ繰り返しただろう？）
人気の無い街を走りながら、あたしは思う。
（毎回同じパターン。いつもだったら、今夜みたいに失敗したあたしは、弱って諦めて家に帰るだけ）
だけど、今夜は違う。復活させられたあたしは、次なる死の手段に向かって走っている。
（せいぜい油断してなよ、馬鹿女が！）

今夜は、いつもとは状況が違うのだから。

あたしは走って走って街を抜け、海岸沿いにある崖にまで辿り着いた。
『危険・立入禁止』と書かれた立て看板を無視して進み、荒い息に肩を上下させながら、湿った海風を肌に感じる。
夜の海は荒れていて、高々と飛沫を上げる波の力強さに、あたしは勇気を奮い立たせる。
（お願い、どうか今度こそ、あのアバズレを出し抜いてやれますように！）
そう祈った次の瞬間、あの音が聞こえ出した。甲高く、神経を引っ掻くような、カツカツカツカツ！女の靴音。
（遅えよ、バァカ！）
あたしは一気に疾走して、真っ暗な崖の向こうにダイブした。
今夜二度目の落下の感覚。暗い水面に思いの外強く体を打たれ、そのまま重い音を立てる水の中に、ゴボゴボと沈み込む。
複雑にうねる流れの渦に体を絡め取られたが、あたしは一切抵抗しない。

《戻りなさい！戻りなさい！！許さないわよ！！》

闇に包まれたの海中で、耳に女の声が鋭く響いた。しかし、いつものように追って来る気配は無い。
（満月に照らされた海の水には、悪しき者は触れることが出来ない…。はは、悪魔払いの本に書いてあった通りじゃない！）
強い流れに揉みくちゃにされながら、あたしは暗い海の底に引きずり込まれていく。走り通しだった肉体が酸素を絶たれ、その苦しみに喘いで、軋む。
《ちょっと、悪しき者って何よ失礼ね！私は神の使いよ！》
女が喚いた。
《戻りなさいったらあ！いいこと？あんたみたいな死にやすい魂は、たいてい未来に大事な役目を担ってるモンなのよ！！》
説得するつもりなのか、女の声が僅かに熱を帯びた。
《死にたがりの奴らは、時期を迎えると一気に、ある種の才能を開花させるモンなの！有名になった奴も多いんだから、ええと》
一瞬の、沈黙。
《えー…、特別有名な所だと、ナチスのアドルフ・ヒトラー。ジェフリー・ダーマーに、切り裂きジャックもそうだし…》
（殺人狂ばっかじゃないよ！そんな連中を生かしたがってる神様なんて、いるわけない！）
《あら嫌ね。神様にだって色々あるのよぅ！あんたの言う、品行方正で純潔なやつだけが、唯一の神様ってわけじゃないんですからね！》
血と苦痛を好むそれも、力を持てばやはり神。そういうことなのだろうか。
（冗談じゃない、殺人鬼になんてなってたまるか！）
酸素を求めるあまりか、こめかみに鈍い痛みが走り、それはみるみるうちに頭全体を覆っていく。
《一回目覚めちゃえば大丈夫なのよお！あなたにはその素質があるんだから！》

（違う違う違う！そんな素質なんて、あたしは）
《すでに一度手を汚してるくせにぃ！！自分でも自覚しかけてるくせに、何を躊躇ってるのよおおお！》

（うるさあああぁい！）

そうだ。
だからこそ、こんなにも死に急いでいるのではないか。

冷たいナイフと、飛び散る血の生暖かさ。刃先が骨に当たる硬い感触。必死で抗って絡みついてきた手を刻み、そこに飾られていた付け爪を散らした時の、あの、言いようの無い気持ち。
よく覚えている、細部に至るまではっきりと、記憶に焼き付いていて離れない。
《思い出してよ、あの快感を、満たされる気持ちを。ほんの三日前のことじゃないのお》
あの出来事からまだ三日しか経っていないということが、何だか不思議でならない。
《嫌な女だったわよねえ。いつも店であなたを目の敵にして。あなたの指名客ばっかりを狙って、わざと色目を使ったりして》
あたしが殺めた、華奢で男受けの良い、バイト先の同僚。かなり前から犬猿の仲だった、お互いに大嫌いだった、エリカ嬢。
日々いがみ合い、消化されないまま積もっていった鬱憤は、ある日ほんの些細な口論を引き金に、パチンと弾けた。
《あんな奴、殺されて当然なのよう。罪悪感なんか捨ててしまいなさいなあ》
女の猫撫で声が、あたしの意識にざらりとした舌を這わせる。
《気分が良かったでしょう？あの生意気な顔を恐怖に歪めてやった時。怯えさせて、絶望させて、痛みを与えた時のあの興奮》

（…違う、違う違う違う）
《認めなさいよう。素直になって。忘れるわけないもの、あんな最高の…》
思わず叫ぼうとして開いた口に、ゴボッと音を立てて海水が流れ込んだ。
肺が塩辛い水に満たされ、本能的に空気を求めてしまう肉体の反応が、より多くの海水を体内に取り入れてしまう。
（苦しい）
頭が痛む。視界が霞む。確実な死の気配を、あたしは感じ取る。
今度こそ、確信する。
《駄目よお！！》
意思とは関係無しにもがいていた手足から、ゆっくりと力が抜ける。
《駄目よ、許さない！こんないい逸材を逃したりしたら、上から何て言われるかああ！》
女の上ずった怒りの声すら、急速に遠くなり。
《分からせてやるからねえ！！私からは逃げられないのよおおおお！！》
負け惜しみの叫びに、心の中で中指を立てる。
（あたしの勝ちだよ。ざまあみろ！）

真っ暗だった視界が、唐突に赤い色に染まった。　力を失った体がぐるぐると回り、どんどん深くへと落下していく。
落ち切った先にあるのは、恋い焦がれた死の世界。
ようやく還れる。赤い闇の先に小さな光が煌めき、それが急速に近付いてくるのを見て胸が震えた。
あれこそが扉。愛しい死の国へと迎えてくれる、暖かな命の終わり。長く長く待ち望んだもの。
あたしは歓喜した。

眩しい光の中に飛び込んだ瞬間、弾ける喜びに耐え切れずに叫んだ。

――――オギャア！

「おめでとうございまあああす！！！」

鼓膜が破れそうな声に驚く間もなく、ワッと押し寄せてきた薬のにおい。

聖なる死の国には有り得ない、品の悪いざわめき、生身の人間の気配。聞き慣れた、人の生活の…。

（え？）

「頑張りましたねえ、可愛い女の子ですよお！！」

耳障りな声が間近で聞こえ、同時にぐらりと体が揺れる。

（え？何？いや待って、この声って？）

混乱するあたしの耳に、煙草臭い息がふぅっと吹き掛けられた。湿り気を含んだ不快な感触、寒気がするほど大嫌いな、これは。

《んふふう、最終手段、奥の手を使わせて頂きましたあ》

（う……）

思わず見上げた先で待ち構えていた、ギラギラした、獣のような二つの目。

《無理な大技を使ったおかげで、ずいぶん寿命が削られましたわよお》

二度と見たくなかった女の顔が、これ以上無いほど残忍な笑顔を

浮かべて、怒りを隠そうともせずにあたしを見下ろしている。
《言ったでしょう、絶対逃がさないってえ！！》
（何で！？）
女の目線がチラリと動き、あたしは促されるまま、壁の鏡を振り返った。
そして、この状況を理解した途端、あまりの悔しさに気を失いそうになる。

（くそ女ああ！こんなのって反則じゃないのかよ！）

鏡の中には、生まれ立ての赤ん坊であるあたしと、あたしを抱く看護婦姿の女が映っていた。
窓から差し込む陽の光に照らされ、和やかな祝福ムードに包まれた分娩室。
終わりの扉をくぐった筈だったのに、辿り着いたのは始まりの場所、全ての苦痛のスタート地点だなんて、あんまりではないか。

煮えたぎる怒りに有りったけの悪意を込めて、あたしは女の顔を睨み付けた。
（畜生、また最初からやり直しかよ！これで諦めるなんて思うなよ、馬鹿が！）
目を細めて愉快そうに微笑み、女は冷たい指であたしの頬を撫で上げる。

《その台詞、そっくりそのまま、お返ししますわ》

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6228b/

あの神様のお望みのまま

2010年10月8日15時17分発行